

認知症になっても住み続けることができる街づくり

認知症への理解を深める



寸劇で認知症の予防を訴える北五歯科医師会の皆さん

認知症は特別な病気ではなく、私たち自身や家族、身近な周囲にも起こりうる病気です。認知症になっても本人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域で暮らし続けていくためには、地域全体が認知症に対する関心を高め、正しく理解し支え合うことがとても大切です。

65歳以上の高齢者人口が、平成37年の国の総人口に占める割合は30・3%と推計されており、当市においては、平成22年の高齢化率27・8%から平成37年には35・5%と、国を上回る勢いで高齢化が進行することが予想されています。

市では昨年度、平成27年度から平成29年度までの3カ年を計画期間とする「五所川原市老人福祉計画・第6期介護保険事業計画」を策定しました。地域の特性やニーズに応じて「医療」「介護」「介護予防」「住まい」「生活支援」が包括的に確保される体制の構築を目指しています。

また、3月から地域包括支援センターに「認知症地域支援推進員」を1名配置し、認知症の方やその家族の相談支援、認知症を理解していた

3月11日、ふるさと交流圏民センターオルテンシアのふるさと交流ホールにて「認知症フォーラム」を開催し、400人を超える来場者が、認知症についての理解を深め、対応方法などを学びました。

だく活動などを行い、認知症ケア体制の強化を図るとともに、介護予防教室なども行っています。

フォーラムでは、認知症対策に関わる、タマちゃん劇団（地域包括支援センター）、ちやかしこ劇団（在宅介護支援センター）、中川劇団（五所川原警察署）、青い森信用金庫（五所川原支店）、キャラバンメイト五所川原、北五歯科医師会、五所川原

市社会福祉協議会の7団体が寸劇を通して、介護施設・介護サービスの利用方法や認知症の方へのサポートの仕方、認知症の予防法などを伝えました。

市では、認知症サポーター養成講座なども開催する予定ですので、身近な人にも起こりうる認知症を正しく理解し、安心して暮らせる街にしていきたいでしょう。

基調講演 「認知症についての基礎知識」

フォーラムの基調講演で、講師として迎えた認知症サポーター医を務める健生五所川原診療所の津川信彦所長は「病気が原因で起こる認知症の症状は、現代の医学では治すことが

できないため、ご家族に多くの対処をお願いすることがある」と説明。身近な生活の中で認知症と気づく事例として、「買物の際の会計で1万円しか出さなくなる」「料理の味が急激に変わる」ことなどを紹介しました。

また、認知症の方への対応として、「わざとやっているのではないため、叱る等の対応は不適切で、症状を悪化させることもある。また、周囲の声かけなどの助けがあれば、症状が改善することもある」と話し、認知症に対する理解と協力を呼びかけました。



講師の津川所長